



# 学級集団を鍛える

文 | toshi  
イラスト | 秋野 純子



## ○初任者指導の「ツマ」

A先生は4年生の担任でした。そのクラスに、授業中に勝手に席を離れ、立ち歩いてしまうBさんがいました。ある日、私はA先生に、「今日はBさん、席についている時間が割と長かったよね。そういうときは席についていられたことをほめなさい」と言いました。

すると思ってもいない言葉が返ってきました。「そんなことでほめるのですか。もう4年生ですよ!」

「そう。ふつうなら、できて当たり前だよね。でも、Bさんにとっては決して当たり前ではない。すばらしいこととは思わないかい」

「でも、そんなことでほめたら付けられないか心配になります。それに、

他の子どもたちはほめないわけですよ。彼らはそれをどう思うでしょうか」  
「そうか。A先生はそう思うのだね。それなら、試しにやってみたらどうだ」

## ○担任の言葉がけが クラスに及ぼす効果とは

A先生の心は柔軟でした。私の助言をさっそう実践したのです。ほめられたBさんは初めびっくりしたようでしたが、同時に、はにかんだような、照れたような表情を浮かべました。学級のみんなも、Bさんにうれしそうなお顔を向けていました。とりあえず、A先生が心配したようなことは見られないうでした。

後日、A先生に第二弾の指導を行います。

「いつも同じようにワンパターンではめることはない。手を替え品を替え、その時に感じたことを、多様なほめ方で伝えることだ。Bさんはまだ立ち歩いてしまうこともあるよね。そういう時、A先生は無言でやり過ごしているが、それはよくない。ただし、しかるのではないよ。ただ残念がつてやればいい」

さらに後日、第三弾を行います。

「Bさんをほめているとき、うれしそうにBさんを見つめている子が何人も

子どもと動き回れる。子どもと感覚がぴったり合う。

それは子どもたちにとって最大の魅力。

「さあ！その若さという武器を最大限発揮しよう」

toshi 先生から新米先生へのエールです。

### < toshi 先生プロフィール >

子どもたちと存分に遊んだ新任時代。日々子どもたちの思考の筋道を大切に、授業で子どもをどう生かすかを考える一方で、学級経営や児童理解のあり方に頭を悩ませた修行時代。子ども第一の学校経営を考えてきた校長時代。35年の教員生活を経て、現在は小学校の初任者指導にあたっている。「ある退職校長の想い」「小学校初任者のブログ」を執筆中。

いるよね。そういう子どもたちにも声をかけるといい。ただし、ほめるのではないよ。『Bさんが落ち着いてきて、みんなもううれしそうだね。みんなのそういう温かな気持ちでBさんに伝わっているようで、先生はうれしい』と、ただただ喜んでやればいい」

実はBさん、立ち歩いているときに、女の子の髪を引っ張ったり、友達の商品をさわって落としたり、いろんな悪さをしていました。それが少なくなつたものですから、被害にあつていた子どもたちはうれしかったと思います。でも、そこにはふれないようにしました。

もう一つ、ふれなくていいことがありました。Bさんは友達に迷惑をかけていましたが、それほどみんなから嫌がられているわけではなかったのです。たぶん気分のいいときは、ひょうきんでみんなを笑わせたりやさしかったりしたこともあったからだと思います。Bさんの成長が発展途上の今、過去にわざわざふれることはないかとA先生に話しました。

第三弾の指導で大切なのは、Bさんをほめ、喜びながらも、教師は決してBさんだけを視野に入れていくわけではないということです。Bさんを見る友達の目も養っていくことが肝要です。学級集団を鍛えるということですね。

それによってBさんはさらに伸びますし、学級もまとまっていけます。そして、それは、いい意味の副作用をもたらすのです。

### ○愛情ある言葉がけは クラス全体に波及していく

かつてはBさんに髪の毛をいたざらされていたCさんが言います。

「先生。最近、Bさんはちゃんと席についているけれど、ただそれだけではないよ。とてもうれしそうなの。ニコニコしているもん」

Cさんのこのような言葉を、学級みんなの前で絶賛します。初任のA先生が心配していたことの一つは、席についているだけでほめることを、他の子が変に思いはしないかということでした。でも、Cさんの言葉を聞くと、変に思うどころか、Bさんへの言葉がけの効果がCさんにまで波及したと言えそうです。Cさんの思いを絶賛することによって、それが学級全体に響いていくものと思います。その結果、Bさんもますます心が鍛えられるでしょう。今、Bさんのような子どもは増えていきます。そういう子どもに対して、担任まで教条主義的に臨んだのでは、子どもはますます荒れてしまつてしまうでしょう。しばらくして、Bさん自身と、Bさ

んを取り巻く学級集団が鍛えられる過程を象徴するような出来事がありました。A先生と学級の子どもたちに受け入れられるようになると、Bさんの表情は一変しました。無邪気で明るくなつたのです。そして、『えんぴちゅ』など、なんと幼児語まで飛び出すようになりました。その過程は、Bさんが幼い頃に戻り、もう一度成長し直していくようにも見えました。学級のみならずそんなBさんをほほえましく思っていたようで、からかうような子は一人もいませんでした。

